

野地の沼の怪～酒井明 説話集31※～

野地という地名はあちこちにあるが、この野地は小川、山北への道の途中である。昔は与市明から赤松坂を越したり、小さなトンネルができて相向いの道を通ったりで野地へは川渡りで行くことが多かった。相向いは今では植林や、藪であるがかなりの面積がある。

その中にさして広くはないが沼があった。

この沼の水は四万十川に続いておって、投げ込んだ物は四万十川に浮かび出るといふ言い伝えが残っていたが、もう早くに埋まってしまい知る人もほとんどいないだろう。

その沼だった所の上に、山肌の崩れた所がある。

ある晩のこと、月明かりの道を一台の自転車が通りかかった。すると、その崩れた山肌の途中から白い塊がふわっと飛んだ。

足を伸ばした兔だと思われた。そんな格好で自転車の前を斜めに飛び下りて音もなく地に着いた。

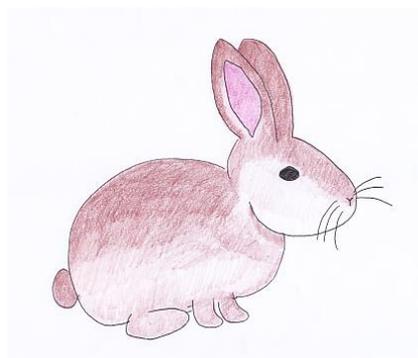
酔うてもおらんし、錯覚を起こすこともない。特別怖いという気もなく、自転車から降りてその一帯くまなく探すが、姿はもとより音もない。

その当時、古いトンネルの中を通る時、白い雲がたなびくのを見たという人がぼつぼつあった。

しかし、トンネルの両方の口に人家があって、煙が丁度トンネルに流れ込んでいたのだろうと、さほど気に止めることもなかった。

夜中に真っ白い塊が音もなく飛び下りる。まさか兔が舞い落ちることもないだろうし、一体正体は何だったのか。それとも夢を見たのか。

本人絶対そんなことはない、それ以後わざわざ夜中に何度かその場を歩き来してみたが、残念なことに向かい面することができなかった。



とにかく色々なことがあるのは間違いないと言うてよかろう。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。